

# 千里ニュータウンにおける世代間交流プログラム作成のための アクションリサーチ (第1報)

Action Research to Make an Inter-Generation Communication Program in  
Senri New Town (Version 1)

兎澤 恵子<sup>1</sup>, 清水 昌美<sup>2</sup>, 吉本 和樹<sup>3</sup>  
岩谷 智<sup>4</sup>, 寺口 瑞生<sup>5</sup>, 登喜 和江<sup>6</sup>

## 要旨

目的：千里ニュータウンのH地区に在住する地域高齢者との世代間交流プログラム作成に向けて、地域高齢者の生活満足度尺度K (LSIK) や現状の課題を明らかにする。方法：H地区市民ホールで実施している行事中の高齢者にアンケート調査を依頼し、返信用封筒で返送された42名（男性13名、女性29名）、平均年齢77.9（±7.1）歳を分析対象とした。LSIK得点を従属変数、性別、年齢区分と、趣味や学習の会への参加頻度（以下、交流頻度）を独立変数とした一般線形モデルにてLSIK得点に関連する要因の多変量解析を行った。また地域自治会とのコンタクトを大切に、地域が中心となる活動にするための関係作りに努めた。結果：交流対象には同年代の中・高年者を82.3%の高齢者が、大学生・中年者を17.7%の高齢者が選択した。また市民ホールは高齢者の重要な居場所であった。LSIK得点に対して交流頻度の有意な主効果は認められなかった。しかし、年齢区分と交流頻度の有意な交互作用がみられ、年齢区分が75歳以上では交流頻度とLSIK得点との関連はみられなかったが、75歳未満群では交流頻度が多いほどLSIK得点が高くなる関係がみられた。考察：高齢者の交流頻度を増やすことは75歳未満の年齢区分では生活満足度を高めるのに有効であると考えられる。参加の少ない適齢の高齢者の交流方法を模索し、参加しやすい環境と希望に沿った世代間交流プログラム作成を検討することの必要性が示唆された。

## Abstract

Objective: To identify the daily Life Satisfaction Index-K (LSIK) and the current challenges of the local elderly to make an inter-generation communication program with the local elderly live in H district in Senri New Town. Methods: The author requested the elderly participating in events held in the H district city hall to complete a questionnaire, collected data of 42 people (13 males, 29 females) aged 77.9 (±7.1) on average returned in a stamped addressed envelope and performed Pearson's chi-square test and multivariate analyses based on a general linear model with the LSIK scores as dependent variables and the age category and the inter-communication frequency as independent variables. The author placed importance on contact with the local self-government association and strived to make a good relation so that the community itself would initiatively take actions. Results: There was no significance shown between the LSIK and the sex/age. However, the existence of a house mate, house type, and career showed significance as factors to enhance the LSIK. The frequency of inter-communication showed significant interaction among the groups of the inter-communication frequency for the age category of 75 and under, indicating that the LSIK was improved as the frequency of inter-communication increased. 82.3% of the local elderly selected the middle and old aged persons as inter-communication partners while 17.7% selected university students and middle-aged persons. The city hall is an important place for the elderly. Examination: Increasing the frequency of inter-communication was effective for the elderly to enhance the life satisfaction. It was indicated effective to make a program which encourages the elderly to participate in inter-communication and satisfies their

1	Keiko TOZAWA	千里金蘭大学	看護学部	受理日：2018年9月7日
2	Masami SHIMIZU	千里金蘭大学	看護学部	査読付
3	Kazuki YOSHIMOTO	千里金蘭大学	看護学部	
4	Satoshi IWAYA	千里金蘭大学	生活科学部 児童教育学科	
5	Mizuo TERAGUCHI	千里金蘭大学	生活科学部 児童教育学科	
6	Kazue TOKI	千里金蘭大学	看護学部	

requirements more and attempt to provide opportunities for inter-generation communication by seeking inter-communication methods for the elderly who are not involved in the program actively.

キーワード：生活満足度、地域高齢者、世代間交流、アクションリサーチ

Life Satisfaction, Local Elderly, Inter-Generation Communication, Action Research

## I. 緒言

わが国において世代間交流プログラムが広がりを見せたのは、家族の世代間のつながりが希薄化したことを背景に、少子高齢化対策や高齢者の生きがい対策として関心が持たれた1990年代に入ってからである（山村,2017）。また、福祉や教育などの分野が様々に関心をもって世代間交流プログラムを展開させるようになった。2000年代に入り、学校教育施策として進展、2008年以降は「学校支援本部事業」の設置に伴い高齢者による小中学生への学校支援やクラブ活動支援など、各省庁による伝統文化や芸能・技能などの継承、保育園や児童館、高齢者の幼老複合施設の設置など多様に展開されている。

そもそも世代間交流の始まりは、1960年代から1970年代の米国において核家族化や家族内の世代間断裂、高齢者の孤立といった事態への対処策として生まれ、全米各地に広まった（Larkin,2017）。

日本においては人生100年時代を目前にして、さらに少子高齢化や独居高齢者の増加、老々介護による疲弊感の増大などを背景に注目度が高まっている。

世代間交流の定義（Newman,1997）は、「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に伝えること」とされている。また更に10年後の定義（草野,2007）は、「子ども、青年、中・高年時代の者がお互いに自分達の持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動」としている。これらのことから、多世代間の異なる世代の双方にとってポジティブな効果を得ることが明記されている。助け合うことの意味が、相手のために行うことだけでなく、自己の向上のためにも役立つように行うことを明確に表現しており、高齢者の人生後半の大切な時期の過ごし方として有効であると考えられる。

また、世代間交流の実施については、成熟されたコーディネーターのような高齢者と子どもをつなげる存在の必要性を指摘した研究（山村,2013）が

ある。時間と場所だけでは世代と世代をつなぐための実施は不可能で、自然発生的でインフォーマルな交流のみでなく、十分な世代間交流を生じさせる成熟者の存在が高齢者と子どもをつなげると述べているが、世代間交流コーディネーター的存在については周知に至っていない。

更に、世代間交流プログラムの効果は、単に充実した時間の保証というだけでなく、一人暮らしの高齢者の活動不測を補うことに影響するものであり（山村, 2013）、健康への利点は大きく、心身両面にわたって健康長寿に影響を与えるものと考えられる。

平均寿命は、厚生労働省調査の「平成29年簡易生命表」によれば、男性は81.09歳、女性は87.26歳である。また、高齢者白書（平成29年度10月1日）の調査結果は、わが国の総人口1億2671万人中65歳以上人口は3,515万人で、高齢化率は27.7%である。健康寿命については、平成28年時点で男性が72.1歳、女性74.8歳であり、過去5年間で男性1.7、女性1.2の伸び率を示している。しかし、健康寿命は平均寿命の伸び率より小さいという状況は続いている。World Innovation Summit for Health（WISH）は、今世紀の保健・医療の重要課題は、慢性疾患と虚弱化、その予防、地域プライマリーケア、支える持続可能な財政システムであることを明言した。地域高齢者が望んでいるのは、生活支援の医療、在宅ケア、介護予防のための支援など、身近なケア提供者の存在である。

一方、当大学はS市H地区の千里ニュータウンの一角に存在する。国土交通省の資料（2016.）によると、今日まで全国のニュータウンは2,000ヶ所にもおよび、団地、戸建て型、孤立型、再開発型などの種類があり多様である。ニュータウンは高度経済成長期の都市への人口集中に対して全国各地の郊外に開発され、計画的に良質な公共施設と豊かな環境を備え、都市住民の住まいの確保と居住水準の向上に効果を果たしてきた。しかし、一斉に入居したことから、現在は早期に開発されたものを中心に、高齢化、子ども世代の減少、地域コミュニティ機能の低下、空き家・空地の増大、

施設の老朽化、近隣センターの衰退、小中学校の遊休化などの課題を抱えている。

国内初の大型ニュータウンとして開発された千里ニュータウンは、1962年から入居が開始され1970年の万国博覧会を経て56年が経過し、当初からの入居者は居住50年以上を迎えている。大阪圏における新たな学術研究の拠点としてのハードな町づくりを経てモデル地区としての役割を果たしてきた。今日も自治会活動をはじめとする様々なコミュニティの創成と住民参画を主体とする町づくりを進展させている。S市は2018年6月現在で高齢化率が23.4%と大阪府よりわずかに低いものの、地域の自治体あるいは一つの大型集合住宅によっては約40%に達するところもあるなど、自治体によって異なる課題を抱えている。

看護系大学生が高齢者への理解を深めようとする時、高齢者との直接交流は有効である。当大学の老年看護学では、H地区自治体との継続可能な範囲で交流を図ることを望んでいる。継続の可能性は、研究者主体ではなく住民主体のプログラム作りにある。具体的には地域行事に参加するというアクションを起こした段階から本研究の手法は始まっており、参加によって見えてきた状況を様々なデータ分析により検証し、研究に関係した人たちの声を反映させ、より良い方向へ変えて行こうと住民と共に検討を重ね、解決に導く方法として有効である。研究数は2011年以降増加傾向にある（吉本ら,2017）。アクションリサーチ（Levin,1946）は、複雑な実社会の出来事について解決に導くには出来事が生起している「場」全体をシステムとして捉える必要があることを示しており、本研究の手法として矛盾しないものである。

これらのことから、本研究の目的は、健康長寿への期待と世代間交流の実施に向けて、第1報としてH地区に在住する地域高齢者の生活満足度や交流意識、世代間交流プログラム作成の方向性を明らかにすることである。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象者の概要

対象者は、大阪府S市H地区に在住しており、市民ホールで定期開催されている地区行事や趣味のサークル活動などに参加している高齢者42名（男性13、女性29名）を対象とした。年齢（標準偏差）は、男性77.9（±9.8）歳、女性77.9（±5.6）歳、平均年齢77.9（±7.1）歳である。

## 2. 調査期間

2018年4月12日～2018年8月31日

## 3. 調査方法

### 1) 調査までの経緯

大学関係者よりS市有職者への紹介を受けて、地区連合自治会会長、副会長（以下、「リーダー」という）への面談と交渉の機会を得た。計画の説明を行い、打ち合わせを繰り返すなかで自治会行事に参加する機会をいただき、独居高齢者とのランチ会や学習会に参加し交流をもった。当大学より教員と教員の声掛けに参加を希望した看護系大学生12名。リーダーより了解を頂き参加し、全体の会場の雰囲気や参加された高齢者の生活の様子を知ることができた。回を重ねることで市民ホールを中心とした地域の様子が分かり、アンケート調査の実施について承諾を得ると共に、リーダーへのインタビュー調査を実施させて頂き、地域の現状と課題、要望について情報を得た。

### 2) 調査方法

S市H地区連合自治会の市民ホールでは、地域自治会やさまざまなH会主催の恒例行事、趣味の会が開催されている。その中の盆踊り大会の練習会、囲碁の会、ヨガ教室、卓球趣味の会に自主参加されている高齢者を対象にアンケート調査を実施した。アンケート内容は、主に年齢、性別などの基礎調査、およびその時の主観的健康感や活動への参加きっかけ、参加頻度（交流頻度）、活動継続の理由、他者との交流に対する思い、交流対象として希望する年代、自分の居住地域に対するイメージや感想・要望などについて、端的に回答できる方法と自由記載方法の2種類の回答方法で実施した。主調査には、生活満足度尺度K（Life Satisfaction Index-K: LSIK）を用いた。回収方法は、用意したファイルに、アンケート用紙と切手の貼った返信用封筒、ボールペンを入れ配布し、郵送により回収した。回収率は89.7%であった。また、リーダーへのインタビューは、半構成的インタビュー法を用い、ICレコーダーに録音し実施後に文字起こしを行い整理した。

LSIK（古谷野ら）は、カットナー・モラル・スケール、生活満足度尺度A（LSIA）、PGCモラル・スケールを組み合わせて開発した尺度である。「人生全体についての満足感」、「心理的安定」、「老いについての評価」の3つの下位尺度から成り、「はい」「いいえ」の範囲を選択、内2問は中間を示す「い



くらかある」を含めた計9問9点の範囲で合計得点を算出し、高いほど生活満足度が高いことを示す。日本語版として標準化されたものであり、信頼性が確立されている。

#### 4. 分析方法

地域高齢者の生活満足度得点および基礎調査を含む質問項目との関連性について明らかにするために、まずLSIK得点とそれぞれの項目との関連について、カテゴリー変数との関連は一元配置分散分析、連続変数との関連はSpearmanの相関係数にて統計学的検定を行った。

次いで、有意となった変数を独立変数とし、LSIK得点を従属変数として、変数間の関連要因を明らかにするために、一般線形モデル (General Linear Model: GLM) による多変量解析を実施した。尚、統計学的解析には、統計パッケージIBM SPSS Statistics version 21を用いた。

#### 5. 倫理的配慮

アンケート調査対象者には文章と口頭による説明を行うと共に、アンケートに答えることや配布した用紙を封筒に入れ投函するかどうかは自由意志であり、投函しないことによる個人への不利益は一切受けないことなどを説明した。また、本研究は、千里金蘭大学倫理委員会の倫理審査の承認を得たうえで実施した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 生活満足度尺度K (LSIK) 得点に関する結果

基礎調査関連の分析結果は、表1. に示したように、変数間の $\chi^2$ 検定結果、性別と有意な関係にあった項目は、同居者有無 ( $p<.004$ )、配偶者有無 ( $p<.001$ )、職歴 ( $p<.015$ )、また、年齢区分と有意な関係にあった項目は配偶者有無 ( $p<.015$ ) であった。他の主観的健康感、参加動機、交流頻度は性別、年齢区分において有意差は認めなかった。

表2. に示したように、年齢、LSIK得点とも男女の平均の差はなく、年齢とLSIK得点との有意な相関はなかった。また、LSIK得点を従属変数とし、性別、年齢区分、交流頻度を独立変数とした一般線形モデルによりLSIK得点に関連する要因を検討した結果、交流頻度の有意な主効果はみられなかった。年齢とLSIK得点の関係は負の関係 (spearmanの相関係数= -0.21) がみられたが統計学的には有意ではなかった。しかし、図1. に示したように、

年齢区分と交流頻度の交互作用と有意な関連がみられ、75歳以上では交流頻度とLSIK得点との関連はみられなかったが、75歳未満群では交流頻度が多くなるほど生活満足度得点が有意に高くなる傾向が認められた。

#### 2. アンケートによる他項目の結果

交流希望の有無については、全員が「交流したい」と回答した。また交流する対象の希望年代は、同年代の中・高年者を希望すると回答した高齢者は82.3%、大学生・中年者と回答した高齢者は17.7%であった。前者の同年代者との交流を希望した回答の中には、「若者とは話しが合わない」、「若い人にはついてゆけない」というコメントが添えられていた。主観的健康感については「良い・まあ良い」については92.9%、「良くない・あまりよくない」については7.1%であった。またH地区のイメージについては「非常に良い、良い」81%、「普通、まあまあ」19%であり、感想や要望については、「長年住んでいるので愛着が深い大好きな町」、「使いやすい市民ホール」などが目立ち、「マーケットと医療のバランスのとれた静かな住宅地」、「子供たちも比較的多く軽い触れあいができる町」、一方で「イベントや活動で多くの人が集まれるもう少し大きい会場があるとよい」、「リーダーの方々がとても頑張ってくれている」などがあつた。日常生活上のこまごました事柄への要望も散見された。自由記載の回答数は28.6%であった。

#### 3. インタビューによる主な結果

主な返答内容は、「地区によって独居高齢者が増加している」、「高齢化率は全体的に高くないが、集合住宅別等にみると40%近い」、「高齢者の問題を考える時に高齢者のことだけを考えても解決の糸口が見えてこない」、「毎年高齢者は増加するので対応が追いつかない」、「子どもと高齢者の交流はあるが、その親世代との交流ができていないため、モラルや文化などの継承がなされていないように感じる」、「親と子どもの関係も希薄になっていると思うことがある」、「現役世代の人たちの協力が得られにくい」、「独居や老々介護の高齢者、障害をもつ高齢者の方々を外に出られるようにすることが大変難しい」、「今は自分達がやれることを精一杯やるしかない」、「市への働きかけも行っているが進展は難しい」など多くの状況について、具体的に事例を挙げながら真剣な説明がなされた。

表1. 対象特性と主な調査項目内訳

性別		女性		男性		p ( $\chi^2$ 検定)	
年齢区分		75歳未満 人数 (%)	75歳以上 人数 (%)	75歳未満 人数 (%)	75歳以上 人数 (%)	年齢区分の差	性差
同居者	無	0 (.0)	12 (57.1)	0 (.0)	0 (.0)	n.s.	0.004
	有	8 (100.0)	9 (42.9)	3 (100.0)	10 (100.0)		
配偶者	無	1 (12.5)	15 (71.4)	0 (.0)	0 (.0)	0.015	<.001
	夫	7 (87.5)	6 (28.6)	0 (.0)	0 (.0)		
	妻	0 (.0)	0 (.0)	3 (100.0)	10 (100.0)		
子ども・親	無	4 (50.0)	18 (85.7)	3 (100.0)	9 (90.0)	n.s.	n.s.
	有	4 (50.0)	3 (14.3)	0 (.0)	1 (10.0)		
職歴	無職	0 (.0)	6 (30.0)	0 (.0)	0 (.0)	n.s.	0.015
	10年未満	2 (25.0)	5 (25.0)	0 (.0)	0 (.0)		
	10年以上	6 (75.0)	9 (45.0)	3 (100.0)	10 (100.0)		
主観的健康感	悪い	1 (12.5)	1 (4.8)	0 (.0)	1 (10.0)	n.s.	n.s.
	普通	1 (12.5)	8 (38.1)	1 (33.3)	4 (40.0)		
	良い	6 (75.0)	12 (57.1)	2 (66.7)	5 (50.0)		
主な参加動機	友人に誘われて	3 (37.5)	16 (80.0)	0 (.0)	5 (50.0)	n.s.	n.s.
	広報をみて	1 (12.5)	1 (5.0)	0 (.0)	1 (10.0)		
	自分で探して	3 (37.5)	3 (15.0)	2 (66.7)	3 (30.0)		
	その他	1 (12.5)	0 (.0)	1 (33.3)	1 (10.0)		
交流頻度	月3回未満	1 (12.5)	2 (9.5)	1 (33.3)	2 (20.0)	n.s.	n.s.
	週1回	3 (37.5)	4 (19.0)	1 (33.3)	2 (20.0)		
	週2回以上	4 (50.0)	15 (71.4)	1 (33.3)	6 (60.0)		

表2. LSIKの関連要因（一般線形モデルによる）(n=38)

変数	F値	自由度	有意確率
性別	0.038	1	0.848
年齢区分	0.004	1	0.949
交流頻度	1.510	2	0.240
性別×年齢区分	0.017	1	0.898
性別×交流頻度	0.384	2	0.685
年齢区分×交流頻度	3.482	2	0.046
性別×年齢区分×交流頻度	0.466	2	0.633

R<sup>2</sup> = .327 (調整済み R<sup>2</sup> 乗 = .043)

LSIK: Life Satisfaction Index K

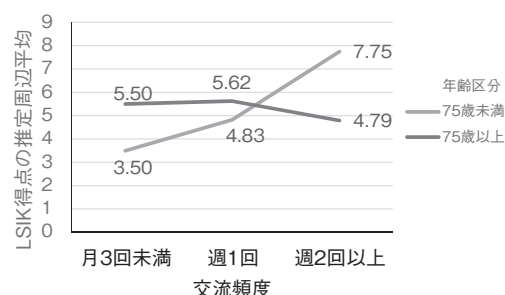


図1. 生活満足度尺度K(LSIK)得点と交流頻度との関係に及ぼす年齢区分の交互作用 (n=38, 一般線形モデルによる。)

インタビューが一段落した後に、連絡をしても返事が得られない独居高齢者の方々から「防災に関する個人カード」の提出はあるという紹介をいただいた。そのカードを拝見し、防災に関することや生活安全に対しての関心の高さ知ることができた。

#### 4. 地域行事に参加した学生の高齢者認知

見学を兼ねた地域行事に参加する許可を得た学生達は、地域高齢者の元気で、明るい会話や高齢者の仲間同士での快活な交流に触れて、それまでの高齢者イメージを変える体験となっていた。

#### IV. 考察

健康長寿の延伸は太古の昔から人々の願いであ

る。本研究は、世代間交流の実施を目指したプログラムの作成に向けて、H地区に在住する地域高齢者の健康を願いつつ対象者への調査を実施した。結果を踏まえ、生活満足度と交流頻度、地域特性や対象特性と世代間交流に関する注目すべき点について考察する。

#### 1. 生活満足度と交流頻度との関連要因

H地区の行事や趣味の会に参加している地域高齢者の生活満足度について、性別、年齢区分、交流頻度との関連性を分析した結果、75歳前後の比較では75歳未満群の高齢者において交流頻度が多くなるほど生活満足度尺度K (LSIK) 得点が高くなる傾向が認められた。先行研究において、個人活動が活発な者ほど生活満足度が高いという結果

を示した研究（岡本,2008）や、老年期の社会活動は生活満足度に影響する重要な要因となつた研究（浜崎ら,2007）に一致するものである。このことは、本研究においても地域行事や多種類の趣味の会、学習会などの活発な実施を確認した。ランチ会の様子では、誰もが華やかにおしゃれをして参加され、副食品の多いきれいなお弁当に手作りの味噌汁が付き、デザートは有名店のケーキやフルーツが添えられてあり、食べながらの会話も弾み、身体にも心にも嬉しい会であった。また、囲碁の会は、経歴の長い方に教わりながら腕を上げているようであり、卓球は多数の参加者が健康的な汗をかき心身共に充実感を味わっていた。盆踊りの練習会は本番3日前から始められ、親子、孫、祖父母と大勢の多世代間の交流で沸き立つ熱気ぶりであった。個人活動や社会活動など多面的な活動によって満足感を得ていることが感じられた。

また、交流回数については、週2回以上の交流があると回答した対象者に週3～5回利用しているとの追記があり、市民ホールの利用率は非常に高い。このことから地域高齢者にとって市民ホールは、重要な居場所であることが分かった。参加理由の中で「友達に誘われて」と回答した者が多く、同年代同士が声かけ合って集まっている現状が可視化されたといえる。更に、声をかけてくれる人がいることが地域での生活の安心感となり、生活満足につながるとした研究（八木,2011）、またイベント前後に生活満足度と主観的健康感を同時に比較した調査結果で有意な関係がみられたとした研究（久保ら,2002）と一致するものである。本研究の主観的健康感については、ほぼ全員が「良い・普通」と回答している。

一方、75歳以上の高齢者では交流頻度の低下に伴い生活満足度の程度も低下を認めた。主観的幸福度は年齢が上がると低下する傾向があるとした研究（野田ら,2001）に類似する。このことは、評価尺度として用いたLSIKは、長期・短期の認知度および短期的な感情を反映しやすい（古谷野,1983）とされていることから、調査が行事や趣味の習いごと終了直後であったことが影響しているとも推察される。高齢者の「強み」という観点から捉えた場合、参加回数の減少は自己体力を冷静に判断した対処行動あるいは適応行動、つまり、自分の体力低下に対する明確な自覚のもとに回数を調整した結果と捉え、認知力の正常さを反映していると考えられ、同様に、多少の身体的な不調が

あっても社会参加ができ、日常生活を自立して営んでいることで折り合いをつけ、自分のやりたいことができるという確信に似た感覚が自分を支えているとした研究（百瀬,2012）に一致するものと考えられる。

これらのことから、世代間交流プログラムの作成に当たっては、全員が「交流をしたい」と回答したことを根底に、参加者の年齢や体力などを十分に考慮した実施内容を検討する必要があることが示唆された。

## 2. 地域特性と世代間交流との関連要因

H地区連合自治体の特徴については、入居して50年前後となる在住期間によって培われた地域に対する愛着心や仲間作りができていた。特に高齢者にとって市民ホールは生活の場以上の重要な居場所となっていることが確認された。また、地域連合自治会のリーダーである会長、副会長へのインタビューからは、地域の隅々まで把握している中で、地域の集合住宅によっては高齢化率が急上昇していることや超高齢社会を反映した課題があること、さらに多世代との交流不足によるモラルや文化の継承を行う機会の減少などが地域として抱えている課題として共有できた。中でも、連絡に対する返事が得られにくい独居高齢者が提出された「防災に関する個人カード」について着目すると、防災などの日常生活における安全管理面に関する不安感が垣間見られ、一つの関心事あるいは課題であることが推察され、関連するイベントが活動のきっかけになるのではないかと考えられた。

これらのことから、今後、世代間交流プログラムを作成するに当たっては、高齢者の日常生活における安全への配慮を満たす企画を視野にいれて検討し、今後のプログラムに反映できる可能性について示唆された。

また、住民のアンケート結果はリーダーに丁寧に提供することとし、インタビューから導き出した内容は提案し検討する内容となった。

## 3. 対象特性と世代間交流との関連要因

地域高齢者の交流を希望する

対象者に、大学生・中年者を選択した高齢者は17.7%であった。今回、当大学の学生はリーダーの許可を得て地域行事に参加させて頂き、高齢者に対するイメージを変える大きな機会を得ている。元気であること、明るく積極的に生きていること



などから感動を得ていた。先行研究において、高齢者から活力を得ることができ、地域活性にもつながり、高齢者理解の学習効果があるとした研究（松田ら,2016：張ら,207：林ら,2018：高橋,2018）に一致するものである。更に、米国の大学においても、世代間交流プログラムへの参加が学生の出席率の向上をもたらすとした研究（Knappら,2000）や、交流が深くなるほど参加者に良い影響が生じるとした研究（Kaplan, 2002）がある。大学生のエイジングの理解のために現実的なエイジング観の形成を促し、ポジティブな態度を形成する効果を得るために有効であることを明らかにしている。

これらのことから、看護系大学生の学習方法に地域在住高齢者との交流体験を加えることは、施設入院・入所高齢者が目指す、退院あるいは退所高齢者の姿を一つの目標としてイメージできることが学生にとって重要かつ必要な学習になると考えられる。

最後に、アクションリサーチは複雑な実社会の出来事について解決に導く手法であり、現場の課題に関わる人達が協働して開発し、プロセスの評価を必要とする方法（秋山,2015）である。研究者が地域に受け入れられ信頼関係を培いながら、高齢者と若者が相手の意向と自己のアウトカムに照らして進める必要がある。

## V. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、高齢者の健康寿命の延伸を目指して、地域高齢者との世代間交流プログラムを作成することとおして、看護系大学生との交流の糸口を見出すために、生活満足度を中心としたアンケートやインタビューによる調査を実施した。研究対象者は、地区の行事や趣味の会に参加可能な活力ある高齢者であったが、今後は対象者の幅を広げ、より多くの地域住民の意向調査を行うことで実態の信頼度を上げることが必要である。また、得た情報を共有し、信頼性と有効性のあるプログラムの検討を丁寧に進めて行く必要がある。

## VI. 結論

本研究の目的は、健康長寿への期待と世代間交流の実施に向けて、H地区に在住する地域高齢者の生活満足度や交流意識、世代間交流プログラム作成の方向性を明らかにすることである。

1. 各関係者の協力を得られたことにより、地域行事に参加するというアクションを起こすこ

とで地域の状況を客観的にリサーチし、課題を共有することができた。

2. アンケート分析の結果では、地域高齢者の生活満足度得点は年齢区分75歳前後の比較において、75歳未満群の高齢者の方が、交流頻度が多いほど生活満足度が高いことが明らかになった。また、地域には高齢者の集まる居場所が存在しており、地域高齢者の多くは他者と交流すること、多年代と集い、楽しむことを望む人が多いことが示唆された。
3. インタビューの集計結果では、集合住宅によって高齢化率が急上昇しており、独居高齢者や老々介護の世帯、障害を抱えた人たちの交流が取れないこと、多世代との交流によるモラルや文化の継承を行う機会が減少していること、中でも連絡に対して返事が得られない多くの独居高齢者がいること、これらの方々が反応した唯一の情報は「防災に関する個人カード」の提出であることが明らかになった。

これらのことから、世代間交流のプログラムの作成に当たっては、住民主体の企画を慎重に検討する必要性が示唆され、今後の方向性を見出した。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、多大なご協力をいただきましたS市H地区連合自治会会長様、副会長様、H地区のみなさま、地域の図書館長様、さらに、地域との関係の労を取って頂いた方々に深く感謝申し上げます。

尚、本研究は千里金蘭大学の平成30年度「特別研究費B」の助成を得て実施した。ここに記し、感謝申し上げます。

## 文献リスト

- 岡本秀明. (2008). 高齢者の社会活動と誠克満足度の関連、一社会活動の4側面に着目した男女別の検討 一. 日本公衆衛生雑誌. 55(6), 388-395.
- Knapp JL, Stubblefield P, (2000). Changing student's perception of aging; the impact of an intergenerational service learning course, Educational Gerontology. 26, 611-621.
- Kaplan M. (2002). Intergenerational programs in schools.; Consideration of form and function. Intergenerational Review of Education. 48(4). 305-334.

- 草野篤子, 金田利子, 間野百子他. (2007). 世代間理論構築のための序説とその歴史, 世代間交流効果. 三学出版, 東京, 1-17.
- 国土交通省. (2016).  
<http://www.milit.go.jp/about/index.htm>
- JST社会技術研究開発センター, 秋山弘子編著. (2015). 高齢社会のアクションリサーチ—新たなコミュニケーション リサーチクエスト創りをめざして—. 初版. 東京大学出版会. 東京.
- 高橋知也. (2018). 社会疫学に関連取り組み・研究と総合診療—高齢者による次世代支援ボランティアプロジェクト REPRINTS—. ジェネラリスト教育コンソーシアム. 10, 118.
- 張平平, 林裕栄. (2017). 看護学生と地域高齢者との世代間交流プログラムがもたらす効果に関する研究. 地域ケアリング. 19(13), 100-102.
- Newman, S. (1997). History and evolution of intergenerational programs. In Intergenerational programs; Past, Present, and Future, eds. by Newman S, Word CR, Smith JO, et al 55-79, Routledge, New York.
- 野田政弘, 出村真一, 南雅樹他. (2001). 在宅高齢者における生活満足度の特徴. 性差, 年齢差および生活満足度相互の関連. 体育学研究. 46, 257-267.
- 浜崎優子, 佐伯和子, 塚崎恵子他. (2007). 地方中核都市における高齢者の社会活動と幸福感に関する研究.  
 (第2報). 北陸公衆衛生雑誌. 33(2), 86-91.
- 林裕栄, 武田美津代, 張平平, 畔上光代, 水間夏子ら. (2018) 地域高齢者と看護学生の世代間交流に関する研究. 保健医療福祉科学. 7, 59-65.
- 松田武美, 福田峰子, 梅田奈歩, 森幸弘ら. (2016). 看護学生・高齢者世代交流による相互学習の取り組みの効果—ライフレビューインタビューによる傾聴体験を通して—. 中部大学生命健康科学研究所紀要. 12, 54-61.
- 村山陽. (2017). 地域における世代間交流の可能性と課題. 老年社会科学. 2, 39, 174-175.
- 村山陽, 竹内留美, 大場宏美他. (2013). 世代間交流事業に対する社会的関心とその現状—新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問誌調査から—日本公衆衛生学会誌. 3, 60, 138-145.
- 百瀬ちどり, 村山くみ. (2012). 地域在住老年期にある主観的幸福感と影響要因—シニア大学受講者の生活満足度と身体的・社会的・対人交流の側面から—の検討—. 松本短期大学紀要. 93-102.
- 八木匡. (2011). 格差感と幸福感形成におけるコミュニティ機能と機会の公平の役割. The Nonprofit Review. 11(1), 21-31.
- 吉本和樹, 兎澤恵子. (2017). アクションリサーチを用いた研究の動向について. 千里金蘭大学紀要, 9(1), 35-42.
- Larkin E, Newman S. (2017). Intergenerational studies ; A multi-disciplinary field. Journal of Gerontology Social Work. 28, 5-16.
- Levin. K. (1946). Action research and minority problems. J. Social Issues. 2, 34-46.